

2022年度 神戸教区神学塾（信徒の神学）No.1

— 復活日計算と東西教会やユダヤ教 —

司祭 フランシス 小林史明

（序）身近な問題から始めたい

6回の連続の話を用意し、信徒にとって基本的なことを身近な問題から取り上げようと思っていました。1回目は、「クリスチャンになる、とはどういう変化なのか」ということを話そうと考えていたのですが、今年のイースター（復活日）の直前に、イースターの日取りについて、日本キリスト教団の牧師さんから質問がありました。私が3年前に、この問題について、宮崎の市内牧師会で話したことがあったので、思い出して聞いてきたのです。そしてその後、ウクライナでの戦争のニュースの中で、ロシア正教会の復活日は、私たちの祝う日より1週間後になっていることに関心を持った人からも質問が来たので、1回目の講座は、復活日の計算方法と東西の教会の暦の違いの話をして、クリスチャンの定義は次回に回すことにしました。

（1）今年（2022年）のイースターの日取りについて

今年の復活日（イースター）は、4月17日でした。ところが、暦を見るとその日が満月になっています。イースターは、4月24日ではないのか、という問い合わせがありました。ちょっと面倒な話ですが、お付き合いください。

祈祷書の1頁の教会暦の説明の中に、「復活日は3月21日以後の満月の後の最初の主日（もし満月が主日に当たるときはその次の主日）である。」と書かれています。これが教会の伝統的なイースターの日取りの説明になっているのですが、この説明では、世界各地の時差のことが考慮されていません。

満月というのは、太陽と地球と月が一直線に並ぶ瞬間です。本当に一直線なら地球の影に隠れて、月食が起こるのですが、普通は地球の影より上か下かを月が通過するので、真ん丸の月が見えるのです。ところが満月になった瞬間というのは、世界中同時に起こりま

す。今回の満月は、日本時間では4月17日（日）午前3時55分でした。満月が日曜日に起こったのは、インドから東の地域でした。それより西に住む人々、つまり西アジア、ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカ大陸などは土曜日なのです。その人たちにとっては翌日17日の日曜日が規則通りのイースターだと、当然のことと受け取るわけです。

世界の教会は、時差はあっても同じ日に復活日を祝いたい、ということで、毎年イースターの日取りを決めるための満月の日を、各地の実際の天文学的な満月日時とは違い、教会は西暦の1900年から2199年までは次のような時に決めているのです。それは、19年周期で特定の日に回ってきます。この周期を「メトン周期」と言います。たとえば、

2014年は4月14日。2015年は4月3日。2016年は3月23日。2017年は4月11日。2018年は3月31日。2019年は4月18日。2020年は4月8日。2021年は3月28日。2022年は4月16日。2023年は4月5日。2024年は3月25日。2025年は4月13日。2026年は4月2日。2027年は3月22日。2028年は4月10日。2029年は3月30日。2030年は4月17日。2031年は4月7日。2032年は3月27日。そしてその翌年は、最初に戻って4月14日になるという具合で、19年周期なのです。

メトン周期と、それによる太陽暦太陰暦の調整

どうして19年周期か、と思う方もあるでしょう。地球は太陽の周りを365日と約4分の1で回ります。ところが月は地球の周りを29日半で1周するのです。そうすると、太陽暦では閏年ではない平年は365日ですが、月は59日で地球を2周するわけですから、354日で12周してしまいます。1年間で11日早く新年を迎えることになり、そのため19年間に7回の閏月（6回は30日。1回は29日）を挿入することで調整。その間に月は地球の周りを235回まわって、19年が終わると、最初の年とほぼ同じ位置で太陽と地球と月が1年を再スタートするのです。それによって、春の満月も19年後は、同じ時期に起こるのです。これがメトン周期。紀元前433年にアテナイの数学者メトンが発見して提案したと言われていました。中国でも同じ発見が独自になされたようです。時差の関係で、上記の19年間の満月の日は、しばしば日本時間ではその翌日の日付になることがあります。こう決めることで、世界中同じ日にイースターが祝えるのです。

(2) 祈禱書の説明の発展（あるいは修正？）

最近作られたフィリピンやアメリカの祈禱書では、イースターについての説明に発展と
言うか、修正がみられます。代表的な箇所を2か所紹介します。

①（アメリカの祈禱書15頁からフィリピンの祈禱書9頁への変化）

1979年にできたアメリカの祈禱書では、私たち日本の祈禱書1頁の説明と似た表現
になっています。すなわち

「イースターの日は常に3月21日当日かそれ以降の満月の日の後に来る最初の日曜日
です。3月22日の前または4月25日の後には起こりません。」

ところが、それから22年後、アメリカの祈禱書を元にしてつくられたフィリピンの祈
禱書2001年版では、このイースターの定義が削除されています。

しかし2007年に改訂されたアメリカの祈禱書では、この部分は現在も残っています。

②（アメリカの祈禱書880頁とフィリピンの祈禱書818頁の変化）

しかし、アメリカやフィリピンの祈禱書には、『イースターの日取りを見つける表と規則』
という資料が終わりの方に付録として載っていて、1979年のアメリカのものには載っ
ていなかったけど、2001年のフィリピンのものには加筆され、2007年のアメリカ
もそれに倣って、加筆したのです。下線の部分です。

『イースターは常に3月21日の春分点以降に発生する満月の後の最初の日曜日です。
日付は古代の教会法に従って固定されており、必ずしも実際の満月に対応するものではあ
りません。 この満月は3月21日から4月18日までのいずれかの日に起こります。満
月が日曜日にあたると、イースターはその次の日曜日です。しかし、イースターの日
は3月22日より早く、あるいは4月25日より遅くすることはできません。』

上記の①の下線の部分がフィリピンの祈禱書から削除されているのは、時差があって、
日本より1時間だけ遅い、やはり東洋の、満月の日が教会の計算上の満月の日の翌日の日
付になり、今年のような混乱を避けるためではないか。また②の下線の太字が加筆され
たのは、西半球も含めて、実は天文学的満月とズれる時もあることについての、弁解のよ
うな文章だと思います。そこで、アメリカの祈禱書に載っている教会暦カレンダーや日取り
の説明文から、黄金数（ゴールデンナンバー）などを使っての説明を紹介します。

(資料①) これは、1945年発行のアメリカ聖公会の祈禱書にある教会暦カレンダーの前半部分です。現在のものでは、頁数が増えるのでわかりやすい古いものを使用しました。

The Calendar		The Calendar	
JANUARY	FEBRUARY	MARCH	APRIL
1 A Circumcision	1 d	1 d	1 g
2 b	2 e Purification of Virgin Mary	2 e	13 2 A
3 c	3 f	3 f	2 3 b
4 d	4 g	4 g	4 c
5 e	5 A	5 A	10 5 d
6 f Epiphany	6 b	6 b	6 e
7 g	7 c	7 c	18 7 f
8 A	8 d	8 d	7 8 g
9 b	9 e	9 e	9 A
10 c	10 f	10 f	15 10 b
11 d	11 g	11 g	4 11 c
12 e	12 A	12 A	12 d
13 f	13 b	13 b	12 13 e
14 g	14 c	14 c	1 14 f
15 A	15 d	15 d	15 g
16 b	16 e	16 e	9 16 A
17 c	17 f	17 f	17 17 b
18 d	18 g	18 g	6 18 c
19 e	19 A	19 A	19 d
20 f	20 b	20 b	20 e
21 g	21 c	21 c	21 f
22 A	22 d	22 d	22 g
23 b	23 e	23 e	23 A
24 c	24 f St. Matthias	24 f	24 b
25 d Conversion of St. Paul	25 g	11 25 g Annunciation of Virgin Mary	25 c St. Mark
26 e	26 A	26 A	25 e
27 f	27 b	27 b	26 d
28 g	28 c	28 c	27 e
29 A	29	29 d	28 f
30 b		16 30 e	29 g
31 c		5 31 f	30 A
xlvi			31 d

The Calendar		The Calendar	
MAY	JUNE	MAY	JUNE
1 b St. Philip and St. James	1 e	1 b St. Philip and St. James	1 e
2 c	2 f	2 c	2 f
3 d	3 g	3 d	3 g
4 e	4 A	4 e	4 A
5 f	5 b	5 f	5 b
6 g	6 c	6 g	6 c
7 A	7 d	7 A	7 d
8 b	8 e	8 b	8 e
9 c	9 f	9 c	9 f
10 d	10 g	10 d	10 g
11 e	11 A St. Barnabas	11 e	11 A St. Barnabas
12 f	12 b	12 f	12 b
13 g	13 c	13 g	13 c
14 A	14 d	14 A	14 d
15 b	15 e	15 b	15 e
16 c	16 f	16 c	16 f
17 d	17 g	17 d	17 g
18 e	18 A	18 e	18 A
19 f	19 b	19 f	19 b
20 g	20 c	20 g	20 c
21 A	21 d	21 A	21 d
22 b	22 e	22 b	22 e
23 c	23 f	23 c	23 f
24 d	24 g Nativity of St. John Baptist	24 d	24 g Nativity of St. John Baptist
25 e	25 A	25 e	25 A
26 f	26 b	26 f	26 b
27 g	27 c	27 g	27 c
28 A	28 d	28 A	28 d
29 b	29 e St. Peter	29 b	29 e St. Peter
30 c	30 f	30 c	30 f
31 d		31 d	
	xlvi		xlvi

2007年のアメリカの祈祷書には、1900年から2089年までのイースターの日付も記されているのですが、それとは別に、復活日の直前の満月の日を示して、その後の日曜日までの日数を簡単に調べられる資料が載っています。前頁のJanuary（1月）からJune（6月）までのカレンダーですが、中央の、March（3月）とApril（4月）を見てください。それぞれ、上から日付が3月は1から31まで、4月は1から30まであります。そして、日付の右には、Aからgの記号が振られています。それに加えて3月と4月には、日付の左に、ところどころに、1から19の数字がちりばめられています。この数字が「黄金数（ゴールデンナンバー）」と呼ばれるもので、これが重要なのです。

（資料②） この資料が、先述の『イースターの日取りを見つける表と規則』です。

（*左のページの最初の段落に、前述の加筆部分が入っています。）

Tables and Rules for Finding the Date of Easter Day

Rules for Finding the Date of Easter Day

Easter Day is always the Sunday after the full moon that occurs on or after the spring equinox on March 21, a date which is fixed in accordance with an ancient ecclesiastical computation, and which does not always correspond to the astronomical equinox. This full moon may happen on any date between March 21 and April 18 inclusive. If the full moon falls on a Sunday, Easter Day is the Sunday following. But Easter Day cannot be earlier than March 22 or later than April 25.

To find the date of Easter Day in any particular year, it is necessary to have two points of reference—the Golden Number and the Sunday Letter for that year.

1. The Golden Number indicates the date of the full moon on or after the spring equinox of March 21, according to a nineteen-year cycle. These Numbers are prefixed in the Calendar to the days of the month from March 22 to April 18 inclusive. In the present Calendar they are applicable from A.D. 1900 to A.D. 2099, after which they will change.

2. The Sunday Letter identifies the days of the year when Sundays occur. After every date in the Calendar a letter appears—from A to g. Thus, if January 1 is a Sunday, the Sunday Letter for the year is A, and every date in the Calendar marked by A is a Sunday. If January 2 is a Sunday, then every date marked with b is a Sunday, and so on through the seven letters.

In Leap Years, however, the Sunday Letter changes on the first day of March. In such years, when A is the Sunday Letter, this applies only to Sundays in January and February, and g is the Sunday Letter for the rest of the year. Or if d is the Sunday Letter, then c is the Sunday Letter on and after March 1.

To Find the Golden Number

The Golden Number of any year is calculated as follows: Take the number of the year, add 1, and then divide the sum by 19. The remainder, if any, is the Golden Number. If nothing remains, then 19 is the Golden Number.

To Find the Sunday Letter

The following Table provides ready reference to the Sunday Letter of any year between A.D. 1900 and A.D. 2099. It will be found on the line of the hundredth year above the column that contains the remaining digits of the year. But in Leap Years the Letter above the number marked with an asterisk is the Sunday Letter for January and February, and the Letter over the number not so marked is the Sunday Letter for the rest of the year.

Hundred Years: 1900	g	f	e	d	c	b	A
2000	b	A	g	f	e	d	c
Years in Excess of Hundreds	00*	01	02	03	04*	04	05
	06	07	08*	08	09	10	11
	12*	12	13	14	15	16*	16
	17	18	19	20*	20	21	22
	23	24*	24	25	26	27	28*
	28	29	30	31	32*	32	33
	34	35	36*	36	37	38	39
	40*	40	41	42	43	44*	44
	45	46	47	48*	48	49	50
	51	52*	52	53	54	55	56*
	56	57	58	59	60*	60	61
	62	63	64*	64	65	66	67
	68*	68	69	70	71	72*	72
	73	74	75	76*	76	77	78
	79	80*	80	81	82	83	84*
	84	85	86	87	88*	88	89
	90	91	92*	92	93	94	95
	96*	96	97	98	99		

To Find Easter Day

When one has both the Golden Number and the Sunday Letter for any particular year, then the date of Easter Day may be found in the Calendar, pages 21 and 22, as follows:

1. The Golden Number prefixed to a day in the month of March or of April in the Calendar marks the date of the full moon in that year.

2. Easter Day will be the next date bearing the Sunday Letter of that year. But when the Golden Number of a given year and the Sunday Letter of that year occur on the same date, then Easter day is one week later. (For example, if the Golden Number is 19—which appears in the Calendar prefixed to March 27—and the Sunday Letter is d, then Easter Day in that year will fall on March 29. If the Golden Number is 10 and the Sunday Letter is A, then Easter Day will fall on April 9. But if the Golden Number is 19 and the Sunday Letter is b, then Easter Day will be one week later, namely April 3.)

アメリカの祈祷書による復活日の日取り計算の解説

細かいところまでは訳しません。大意は、イースターを決める満月の日は3月21日から4月18日の間に当たります。カレンダーに1から19までの数字が3月22日から4月18日までに散らばっているのは、それが満月の日を示す黄金数(ゴールデンナンバー)

だから。(注3月21日に数字がないのは、このカレンダーが1900年から2099年までのものだからです。3月21日が満月になったのは、1894年が最後で、次は2209年です。もっとも、天文学的には、2019年の3月21日が東半球では満月でしたが。)

大切な数字はふたつ。①満月の日を示すゴールデンナンバー（黄金数）を見つけること。

対象になる年を19で割り、余った数字に1加えるのがゴールデンナンバーです。

今年を例に挙げると、2022年の $2022 \div 19 = 106$ 余り8。これに1加えると、 $8 + 1 = 9$ 。これが、ゴールデンナンバー。割り切れた時、余り0では使いにくいので、便宜上1~19で割り振る。そのゴールデンナンバー9を資料①で探すと、4月16日がそれにあたります。つまり、イースター直前の満月の日は、4月16日だとわかります。

もうひとつは、②日曜日を示す記号を見つけること。

上の①で満月の日がわかって、知りたいのはその後にくる日曜日はいつなのかということ。2頁前のカレンダー、1月1日から同じ曜日をj示すために振られた記号A、b、c、d、e、f、g、がここで活用されます。前頁の右側の表は、1900年代と2000年代の各年の日曜日がAからgのどの記号に当たるかを示すものです。今年の場合は、2022年ですから、下2桁の22という数字を捜します。その22の行を上に見てゆくと、1900年代の所はA。2000年代の所はb。このbが今年の日曜日です。満月である、4月16日は2頁前の表ではAですから、A（土）16日、b（日）17日、となって、17日がbの復活日。尚、この表の数字の右上に、「*」の印があるのは、閏年で1日ズれることを表します。資料1のFebruary（2月）の一番下の29の右横には記号がないのは閏年だからです。*印のついた年は、1月と2月はその上にある記号が日曜日ですが、3月以降は*印のない数字の上にある記号が日曜日になるのです。

このような、カレンダーにゴールデンナンバー（黄金数）を入れての復活日計算が現在まで使われていますが、1995年に南オーストラリア天文協会が、画期的なイースターの算定方法を発表していました。これは家にある電卓を使って簡単に計算できるものだから、皆さんもやってみてください。復活日の算定方法はラテン語で「コンプトゥス」と言い、コンピューターの語源にもなっていて長い歴史があるのですが、これを「電卓」を使って調べられるというのも、洒落みたいておもしろいですね。次にそれを紹介します。

(3) 新しいイースターの日取り計算の画期的な資料

(資料③) イースターの日取りを見つける表 (326年から2599年まで)

(1995年にオーストラリアのロナルド・W・マーレン氏が作成した、電卓と簡単な計算でできる画期的方法)

Table A: PFM Date for Years 326 to 2599 (M=March, A=April)

TableA (表 A) から TableE まで、5つも表があるので、面倒ですが、右の TableA だけでも、満月の日が特定できます。

(TableA の使い方)

探したい年の復活日を知るために、たとえば今年2022年なら、電卓に2022と打ち込み、それを19で割ってください。答えは、106.42105・・・と出て来るでしょう。その答えの小数点以下3桁の数字を表の左端から見つけてください。「.421」は、上から9番目です。これがゴールデンナンバー(黄金数)に相当します。この段を左から見てゆくとA7,A14,A15,A16,A17,A18と並んでいます。最初の枠は復活日が決められたニケヤ会議の開かれた翌年である326年から、時間のズレを調整したグレゴリオ暦の制定された1582年まで

raction after dividing year by 19	326	1583	1700	1900	2200	2300
	- 1582	- 1699	- 1899	- 2199	- 2299	- 2399
					2400	2500
					- 2499	- 2599
.0 (none)	A5	A12	A13	A14	A15	A16
.052	M25	A1	A2	A3	A4	A5
.105	A13	M21	M22	M23	M24	M25
.157	A2	A9	A10	A11	A12	A13
.210	M22	M29	M30	M31	A1	A2
.263	A10	A17	A18	A18	M21	M22
.315	M30	A6	A7	A8	A9	A10
.368	A18	M26	M27	M28	M29	M30
.421	A7	A14	A15	A16	A17	A18
.473	M27	A3	A4	A5	A6	A7
.526	A15	M23	M24	M25	M26	M27
.578	A4	A11	A12	A13	A14	A15
.631	M24	M31	A1	A2	A3	A4
.684	A12	A18	M21	M22	M23	M24
.736	A1	A8	A9	A10	A11	A12
.789	M21	M28	M29	M30	M31	A1
.842	A9	A16	A17	A17	A18	M21
.894	M29	A5	A6	A7	A8	A9
.947	A17	M25	M26	M27	M28	M29

4月7日が満月の日ということ。Mは3月(March)、Aは4月(April)の略号です。

表を見たら、何となく推測できるでしょうが、右から3番目の行が1900年から2199年までの、19年周期で回ってくるイースター直前の満月の日を示しています。上から、A14は1, A3は2, M23は3, という風に順番に数字をあてはめると、一番下が19になります。これが(資料①)の3月と4月に割り振られたゴールデンナンバー(黄金数)と一致します。祈禱書の計算方法は西暦を19で割り、余った整数に1を足したけれど、こちらは足さないで西暦の数字を単純に19で割ります。余った整数の数字を見つけるのではなく、電卓で小数点以下の数字を見て判断するのが新しいのですが、結果的には黄金数と同じ意味になります。これだけで、来年のイースター直前の満月もわかるので、目的はほぼ達成されているのですが、満月の日の次に来る日曜日までの日数、別の言い方をすれば、その年の満月の日は何曜日なのか知る必要があるのです。今年や来年の曜日は簡単にわかりますが、祈禱書の方法では100年後とか300年前のことは、それだけではわかりませんね。祈禱書の中に載っている(資料①, ②)では、Aからgの記号も使って、1900年から2099年までの範囲でのイースターの曜日は探し出せますが、この新しい計算方法では、ここでは省略していますが、数字計算だけで西暦326年から4099年までのイースターの日取りがわかることになっています。

(4) 満月の日から次の日曜日までの計算

そこであと4つの表を使って、満月からイースターまでの日数の計算方法を紹介いたします。

少し面倒ですが、右にあるTableB、TableC、と、次の頁にあるTableD、

TableE、という4つの表を使い、前のページのTableAでわかったイースター直前の満月の日から、日曜日までの日数がわかります。これは(2)の後半の祈禱書による日曜日までの日数計算に似た作業です。

Table B: PFM Date for year

(M=March, A=April)

	-	-	M21	M22	M23	M24	M25
	M26	M27	M28	M29	M30	M31	A1
	A2	A3	A4	A5	A6	A7	A8
	A9	A10	A11	A12	A13	A14	A15
	A16	A17	A18	-	-	-	-
Result:	0	1	2	3	4	5	6

Table C: First 2 digits of year

(eg 19 for 1995, or 03 for 326)

	-	-	-	-	03	04	05
	06	07	08	09	10	11	12
	13	14	15*	-	-	15*	16
	-	17	-	18	-	19	20
	-	21	-	22	-	23	24
	-	25	-	26	-	27	28
	-	29	-	30	-	31	32
	-	33	-	34	-	35	36
	-	37	-	38	-	39	40
Result:	6	5	4	3	2	1	0

Table D: Last 2 digits of year

	00	01	02	03	-	04	05
	06	07	-	08	09	10	11
	-	12	13	14	15	-	16
	17	18	19	-	20	21	22
	23	-	24	25	26	27	-
	28	29	30	31	-	32	33
	34	35	-	36	37	38	39
	-	40	41	42	43	-	44
	45	46	47	-	48	49	50
	51	-	52	53	54	55	-
	56	57	58	59	-	60	61
	62	63	-	64	65	66	67
	-	68	69	70	71	-	72
	73	74	75	-	76	77	78
	79	-	80	81	82	83	-
	84	85	86	87	-	88	89
	90	91	-	92	93	94	95
	-	96	97	98	99	-	-
Result:	0	1	2	3	4	5	6

Table E: Following Sunday

	0	1	2	3	4	5	6
Step 2 result:	7	8	9	10	11	12	13
	14	15	16	17	18	-	-
Day of week							
of PFM date:	Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
Days to add for							
next Sunday:	7	6	5	4	3	2	1

(作業1) TableB,C,D

を使って、満月から日曜日までの日数を調べる作業をします。

• TableB で TableA の結果の枠の下の数を見る。

A16 は「0」

• TableC で対象年の上2桁の枠の下の数を見る。

20 は、「0」

• TableD で対象年の下2桁の枠の下の数を見る。22 は、「6」

(作業2) TableE を使って満月の日の曜日と、その日から日曜日までの日数を見つけます。

• (作業1) でみつけた3つの数字を足す。0+0+6=6

• TableE の6の枠を見つけ、その下を見ると、満月の日の曜日が、土曜日 (Sat) であり、その1日後が日曜日です。

4月16日の1日後、4月17日がイースターと判明。

(注) PFM とは、『Paschal full moon』 “復活日に関連のある満月 “という意味の略語)

(5) イースターの日取りを決めたのは、325年のニケヤ会議だった。

2頁前の TableA の最上段にある「326年~1582年」、の説明が必要でしょう。

皆さんは聖餐式の説教のあと、「ニケヤ信経」を唱えていますね。これはニケヤ会議という、教会会議で決まった「信条」(信仰箇条ということですね。)を礼拝で告白しているのです。これは、325年5月20日から6月19日まで小アジアのニコメディア南部の町ニカイア(現:トルコ共和国ブルサ県イズニク)で開かれた、キリスト教史における最初の全教会規模の会議でした。この時まで、世界各地の教会はその地方独自の伝統的な守り方で礼拝し、復活日もそれぞれ、自分達の考えで祝っていました。信仰箇条を統一するのが主な目的でしたが、バラバラに祝っている復活日についても、「3月21日(暦上の春分

の日) 当日あるいはそれ以降の最初の暦上の満月(新月から数えて14日目)を過ぎた後の最初の日曜日」を復活日に決めました。この当時の暦は、1年を365日にして、4年に1度閏年には366日にするのを、ローマ帝国の創始者であるジュリアス・シーザーが決めました。彼のラテン語の名前は「ユリウス・カエサル」なので、この4年に1度の閏年の暦を「ユリウス暦」と言います。この会議は復活日の季節より後でしたので、その翌年の326年から復活日は統一されたのです。

16世紀に暦の調整があり、ユリウス暦から現行のグレゴリオ暦へ変更。

ところが、問題が起きました。天文学者たちが夏至や冬至など調べているうちに、暦より地球の季節の変化の方が速いことが分かってきました。自然は春を迎えているのに、暦はまだ春にならない。それで、1582年に、当時のローマ教皇グレゴリオ13世が、暦の調整に着手したのです。天文学者たちの研究で4年に1度の閏年は多すぎる、400年間に100回の閏年ではなく、97回が適当である、という結論が出ました。ユリウス暦が始まって1500年以上過ぎているので、先ずその年の暦を10日進めなければなりません。そこで1582年の10月4日の翌日を10月15日にしたのです。そして、やがて来る1600年から2000年の間の400年間に97回の閏年にしたい。別の言い方をすれば、この間に3回は閏年を平年の365日に変更することを決めました。具体的には、1600年は従来通り閏年にしますが、1700年、1800年、1900年は平年にして2000年は閏年。400年ぶり。日本の歴史で言えば、関ヶ原の戦い(1600年)以来の閏年でした。もっとも関ヶ原の頃、日本ではそんな暦はありませんでしたけど。

東方教会はニケヤ会議の決定を重視し、変更しない。

ところが、東方教会は、ニケヤ会議の決定を簡単に変更してはならない、ということで、そのままの暦を使っているわけです。TableAの「326-1582」の行を現在も使っているのです。西暦はどちらも同じ2022年ですから、「A7」というのが、彼らの満月の日。実際の満月からはズれていますが、これを守っているのです。ただし、彼らはグレゴリオ暦を採用していませんから、その時点で、私たちの暦より10日遅くなっていますし、その後も3日閏年を守っているのです。A7つまり4月7日に10日と3日を加えたら、私たちの暦と一致するわけですから、4月20日が満月ということになります。その次の日曜日は4月24日なので、私たちより1週間遅いイースターを祝ったということです。

(6) 復活日計算におけるユダヤ暦の影響

私たちが教会で祝うクリスマスとイースターは、前者が毎年冬至の過ぎた12月25日という固定した太陽暦に根拠を置く祝日であるのに対して、後者はユダヤ教の春を告げるニサンの月の過越祭と非常に密接な関係にある、月の満ち欠けをもとにした太陰暦を根拠にしています。前者は「すべての人を照すまことの光があって、世にきた。」(ヨハネ1:9 口語訳) などから、実際にはこの時期に羊飼いが野宿などできない寒い季節ですが、まことの光の誕生にふさわしいとして、毎年この時期に祝っているのです。ところが、イエス様の復活は、ユダヤ教の最大の祭りである過越祭と重なります。この祭りでユダヤ人たちはモーセの指導でエジプトを脱出し、自由の民になった出来事を祝うのです。

ユダヤの暦は、太陰暦という、月の満ち欠けで日にちを数えています。

ニサンの月の10日に各家庭は小羊を一匹用意します。月が丸くなる満月は、15夜と言いますが、ユダヤ人の場合は、一日は日没から始まるので、14日の午後、羊を殺して、その血を家の柱と鴨居に塗ります。そしてその日の夜は、もう15日です。そして満月の夜に、過ぎ越しの食事をして、神様が自分たちの先祖をエジプトの奴隷生活から解放して、自由な国民にしてくださったことを感謝するのです。(出エジプト記12章参照)

その出エジプトという出来事後、1300年くらい過ぎたイエス様の時代、紀元30年の4月7日は、金曜日でした。これはユダヤの暦では、ニサンの月の14日にあたります。この日、午後3時頃イエス様が十字架にかかって死んだと言われています。ちょうど、ユダヤの伝統的な祭りで、過ぎ越しの食事をするために、小羊が殺される時刻でした。

そこで旧約を知っているユダヤ人クリスチャンはイエス様こそまことの過ぎ越しの小羊と理解しました。(祈祷書193頁の復活日の特別叙唱、Iコリント5:9など参照)

最初の頃、イエス様は過越祭に十字架に架けられたのだから、ユダヤ教の過越祭をイースターにしようという考えもありましたが、イエス様を殺したユダヤ人の祭りとは切り離し、復活された日曜日をイースターにする方向で決められました。ただ、ユダヤ教の祭りの時だった事実を無視できなくて、毎年満月の日を気にしながら復活日は毎年移動するのです。ただユダヤ教では天文学的な満月にこだわりがあり、2頁に書き出した2014年から2032年までの19年間で、2016年、2024年、2027年は、教会の復活日の根拠となる満月より1か月後の満月で、彼らはニサンの月の過越祭を祝っています。

最後にユダヤ教の暦を紹介します。

イスラエルには2種類の一年の始め方があります。宗教上の暦は春から。右側のニサンの月から始まり、イヤール、シバン、と右へ進み7つ目で左端のティシュレーに回って、アダルで終わります。閏月は第二アダルの月を入れて調整しています。各月は、30日と29日が交互に続き、14日の夕方から日没後15日の満月になるようです。出エジプト記12章の正月とはニサンの月のこと。しかし政治的な暦は秋（9～10月頃）ティシュレーから始まるので、こんな表記になっています。（資料⑧）

